

神戸 フランス人の 目から見た国際交流



兵庫県産業労働部観光・国際交流課国際交流員

Martial Henry-Trapon

マルシャル・アンリ＝トラポン

お父さんのおかげで(時々の所為でも言えます)、生まれてから世界中のいろいろな国に一年間から六年間という長期間滞在しました。そして、お父さんは「友達をつくるには人と会い、さまざまなことについて話し合うのが最良。その国の言語、歴史および習慣に興味を持ちなさい。友情とはコミュニケーションから始まる」とよく教えてくれました。このようなアドバイスのおかげで、次々と別の国に引越しても、新しい友達をつくるのは困難ではありませんでした。もちろん、最初の接触はいつも容易とはいえませんが、お互いに興味を持つ分野を見つけた途端に、相手に声をかけ始め、あっという間に仲間入りできました。

案外なじむのに苦労したのは、国際化の発展や促進のため、一番お金を使っている国、日本でした。考えてみれば、原因はさまざまあるに違いありません(普段大人は外国人と友好関係を結ぶのは子どもよりも苦手であること、言語の壁、日本人の引っ込み思案なところ、西洋文化と東洋文化は根本的に異なること等)。しかし、初めて日本に来た時、最も驚いたのは「外人(外国人)」という言葉です。なぜかというと、日本人の大半は、世界は日本とその他という二つのグループに分かれていると思っと思っています。彼等にとつて、われわれ日本に在住している外国人は、メディアが提供した固定観念に基づく部分的にしか知

られてない、あるTerra Incognita(未知の世界)の代表者といつても過言ではないでしょう。

この記事を読んでいる読者の中には「それはない、言い過ぎる」と思う方がいるかもしれませんが、考えてもらえばと思います。日本人と会つと、「外国人ですか、どこから来ましたが、日本は好きですか」と必ず聞かれることでしょう。そう言われたら、どうしても相手は自分の国より日本のことをどう思うかに関心を持っているような気がします。



兵庫県に来てから、もう一年半たちましたが、国際交流の分野に関しては日本の自治体が欧米の自治体に何ら劣らないことを何度も確認できました。例えば、兵庫県、特に神戸市は主に国際貿易や海外との関係のおかげで発展してきた地域なので、海外との交流関係における長い歴史と伝統を持っています。その証しとして、兵庫県は現在アメリカのワシントン州、ブラジルのパラナ州、ロシアのハバロフスク地方、ドイツのシュレスヴィヒ州、中国の広東省と海南省、パラオ諸島共和国、そしてフランスのアヴェロン県、アンドレ・ロワール県、セーヌ・エ・マルヌ県と姉妹友好関係を結んでいます。そして、私は国際フォーラムや行事等に参加でき、アルジェリア大統領やフランス大統領夫人にも会い、フランス、ドイツ、スペインから来た団体の通訳・翻訳も務め、将来に役立つさまざまな技術や知識を身に付けました。

当然前記の役目は重要ですが、個人的には市民団体やクラブをはじめ、大学、学校などで行われる講演も同じぐらい重要だと思っています。フランスのことをある程度知っている人でも、海外県・海外領土の存在、または欧州連合に加盟した二五カ国の名前を知る日本人は本当に少なく、びっくりしました。片田舎の小さいまちの場合ともかく、一〇万人以上の外国人が住んでいる兵庫のようなところでは

れは考えられません。この原因は決して単なる興味不足からだけではありません。日本のメディアは、世界各国について適切な、しかも便利な情報をあまり放送しないからだと思います。

そのため、今までいろいろな形で（自国を紹介する講演、料理教室、美術教室、展示会、コンサート等）、できるだけ正直に（フランスの面についてもマイナスの面についても話します）、できるだけ大勢の人に理解しやすい（例えば、フランスと日本の小学生の一日を比較します）講演やプレゼンテーションをしました。その結果、皆に興味津々でフランスや欧州連合について質問をされました。



最後に、あまり紹介されていないJEPプログラムのもう一つのフランス面を挙げたいと思います。それは国際交流員自身の国際化です。日本に来る前にはフランスの立場を無理やり守り、自分の意見を強いる傾向がありました。県庁で働いてからは多くの国の国際交流員や日本人の同僚と意見を交換し、人それぞれの見解があることを理解でき、以前より視野が広がったような気がします。彼らのおかげで、私はだんだんと本当の「国際人」に近づいています。



Martial Henry-Trapon

フランス・パリ生まれ。父の仕事の関係で、アメリカ、イギリス、メキシコ、アルゼンチン、チリ、スペイン、ギリシャ、ロシア、日本に滞在。1998年にパリ第七大学大学院東洋言語文化部日本語課を卒業してから、フランス陸軍工兵隊に入隊。2000年に文部科学省留学生として国立広島大学文学部国史科に入学。2003年に博士課程を取得してから、パリ第七大学付属総合図書館国際局に勤務。2004年から国際交流員として兵庫県に勤務。趣味はスポーツ(空手、ランニング、アウトドアスポーツ等)、外国語や歴史の勉強、読書、映画鑑賞、書道、デッサン、料理。

ニュージーランダー・ イン・ナガサキ



長崎県立長崎東高等学校外国語指導助手
Pene Dalton ペネ・ダルトン

JETプログラムで日本にやってきたALITの多くが、日本に滞在する中で、赴任した土地を大変気に入ってしまうようです。私も例外ではありません。妻や幼い子どもとともにALITとして長崎で暮らすことができ、これまでの人生の中で最も価値ある経験をしているといえます。長崎というのは、日本史の中にとどまらず、世界史の中でも重要な意味を持っている土地です。一年間のカレンダーが祭りで埋め尽くされるほど、地方の伝統文化で満ち溢れている都市です。「精霊流し」として名高い盆祭り、中国盆、おくんち、ランタンフェスティバル等々、数限りなく、すべて長崎という土地柄の強いアイデンティティーが反映されています。これらには豊富で新鮮な魚介類や、おいしい郷土料理がつきものです。中でも長崎ちゃんぽん、皿うどん、そしてカステラなどは、すべて長崎を象徴する代表的な味覚として全国的に有名です。

建築物も豊かで、にぎわいを見せる中華街やオランダ坂などは言うに及ばず、ゴシック様式の大聖堂、中国寺、仏教寺院や神社など数々の建築美術を誇っているまちでもあります。

山々の天賦の美しさに抱かれたこの港町は、天然の漁港でもあります。長崎料理、建築物、そしていろいろな祭りの中にも反映されている異国文化の影響のすべてが、このまちに住む者の気持ちを引きつけ、多

くの外国人が日本人と同様に長崎を愛するのにも不思議ではありません。

日本の歴史上(世界の歴史上からも)、国際化の重要性を示す例として、長崎はよい面と悪い面を持っています。一六四一〜一八五九年の江戸時代における鎖国政策の中で、長崎だけは外国への小さな窓口を持っていました。今日、主な観光地となっている出島は、江戸幕府の西洋社会に対する監視の下、オランダ商人が西洋医学、ファッション、さまざまな貿易物資などを持ち込める限られた場所でした。やがて鎖国政策が解かれ開国されてからも、外国人は長く外国との接点になっていた



この地に集まり、日本は彼らをここに迎え入れました。

A L Tとしてここに赴任してきた私は、いまだにこの伝統が変わっていないのではないかとこの感じを抱いています。というのは、長崎では、「国際化」という言葉は単に言葉だけの問題ではなく、長崎の過去・現在においてもっと現実的なテーマなのです。五〇万都市の長崎における在住外国人のコミュニケーションは大きいです。長崎はその国際社会を支えるさまざまな取り組みを行っています。いろいろな祭りや、ワークショップ、会議あるいは住民への日



常的な支援を通して国際相互理解を深めようとの長崎の努力がうかがえます。

長崎は第二次世界大戦の終結につながった悲劇からも、おそらく海外に最も知られた市ではないかと思えます。広島に続き、長崎は一九四五年八月九日午前一時二分に原爆を投下されました。市は大規模に壊滅し、約七万人が即死し、後年、さらに約七万人が被爆の影響で亡くなっています。私は毎年、勤務先の高校で、原爆投下時に合わせてなされる黙とうの儀式を目にできました。教室の窓は大きく開け放たれ、生徒たちは原爆投下の瞬間に向かつてカウントを始めます。語り継がれる物語や日記、詩、祈り、それらが人々に何十年も前に起きた恐怖の日を蘇らせます。午前一一時二六分ちょうどに、サイレンや、教会の鐘が鳴り始め周囲の山々を振動させます。その荘厳な響きの余韻の中で、最後は平和についての討論会を行い、平和を願う折鶴を作って締めくくられます。これは長崎市民に対するキリスト教の影響の大きさを思わせます。しかし、人々は痛ましい過去だけをいつまでも引きずっているようには見え、そこには悲劇の日についての許しの雰囲気さえ感じられます。長く豊かな歴史の中で、彼らは長崎のカレンダ―の最も重要な日として位置付け、郷土が引き受けてきた役割を思っこの日を見守ります。敬けんな祈りを捧げながら。

信じ難いことですが、この数日後、同じ人々が今度は精霊流しや中国盆、その後続くおくんちを、熱狂と生への歓喜や躍動の中で迎えます。だから、私はますます長崎が大好きになります。私の家族は、多くの行事や味覚、長崎が提供してくれるこれら多くの経験を楽しむという恩恵に浴してきました。

J E Tプログラムや勤務先の教職員を通して、ここにいる間に仲間のA L TやC I Rの友達ができ、多くの生徒たちとの出会いをもらいました。この魅力的な日本の片隅にあって、私は日本のみならず全世界にとつて重要な意味を持つこの地について、多くのことを学んだように思っています。



Pene Dalton

ニュージーランド・オークランド生まれ。5年前、英会話の先生として来日。大学の主専攻はフランス語で、副専攻はスペイン語。来日する前、銀行で3年間勤務した。福岡県出身の妻と1歳半の娘と長崎に在住。JETプログラムを経て、日本で起業してみたいが、後々はニュージーランドに戻り、公職に就きたいと思っている。



Martial Henry-Trapon

symbolisée par les jumelages ou les liens d'amitié qui le lient avec l'état de Washington, le land de Schleswig-Holstein, les provinces de Hainan et du Guangdong, les Palau, les préfectures de l'Aveyron, de l'Indre-et-Loire et de la Seine-et-Marne. Depuis mon arrivée, j'ai participé à plusieurs forums internationaux, à la visite du Président algérien et de Mme Chirac, fait de la traduction pour des délégations françaises, allemandes ou espagnoles.

Cette partie de mon travail est bien sûr importante, mais je considère tout aussi importants les présentations et conférences que je suis parfois amené à faire auprès d'écoles, d'universités, de clubs ou d'association de citoyens. Combien de fois j'ai été étonné de découvrir que si le France était connue du plus grand nombre (bien que la plupart du temps sous la forme de clichés), bien peu connaissent l'existence des DOM-TOM ou les 25 pays membres de l'Union Européenne. Cette ignorance n'est nullement le fait d'un manque d'intérêt, mais le simple résultat d'une absence d'information. Cela pourrait se comprendre dans une petite ville de campagne, mais pas dans une préfecture comme Hyogo où résident plus de 100 000 étrangers.

C'est pourquoi, j'essaie de parler de mon pays natal de la

manière la plus diverse (cours de cuisine, expositions artistiques, ateliers de peinture, concerts, etc), la plus sincère possible, sans hésiter à parler des aspects négatifs quand il y en a, et en essayant de faire le plus de parallèles possibles avec le Japon (p.e. la journée d'un écolier français et celle d'un écolier japonais) afin de rendre ses informations les plus accessibles et les plus compréhensibles possibles. Et bien vite, les questions posées par l'assistance révèlent bien vite un intérêt évident pour la France et l'Europe.

Mais il y a également un autre atout du Programme JET qui est peu souvent mis en avant; celui de l'internationalisation des participants eux-mêmes. Durant mes premières années au Japon, j'avais une fâcheuse tendance à considérer le monde seulement du côté de la lorgnette française. Grâce au programme JET, j'ai l'occasion de confronter mon point de vue avec mes collègues venus d'Asie ou d'Amérique du Nord et de discuter sur de nombreux points de l'actualité. Grâce à eux, je suis certain que ma compréhension du Japon et du reste du monde s'est améliorée et affinée, faisant de moi un véritable *kokusaijin*.

フランス語

Pene Dalton

community of foreigners living in this city of half a million people. Nagasaki City makes an effort to support its international community in whatever way it can and actively promotes international understanding and communication through various festivals, workshops, conferences and daily assistance to its residents.

Perhaps Nagasaki is most well known abroad as a result of the tragic events that took place in the closing days of World War II. Following the atomic bombing of Hiroshima, Nagasaki was bombed on the 9th of August, 1945 at 11.02am. The city was damaged on a large scale, with some 70,000 people killed outright, and another 70,000 dying in the years that followed from bomb related causes. Every year, I observe the minutes of silence at the high school where I work. The classroom windows are wide open and children recount through the hour leading up to the time of the bombing: stories, diary entries, poems and prayers, which take you back to that awful day so many years ago. At 11.02am, the sound of sirens and tolling church bells, reverberate through the surrounding hills. It is solemn and

airy, but it always ends with discussions of peace, and the folding of paper cranes. Perhaps it is the large Christian influence on the citizens of Nagasaki, but there is an air of forgiveness regarding this tragic day. Nagasaki people don't dwell too much on the past. They observe this day as they do any other important day in the Nagasaki calendar, with a respect for the place it plays in their long rich history; with the reverence and solemnity it deserves.

It's hard to believe that only a few days later, the same people will celebrate the Shoro Nagashi (Obon festival) with an enthusiastic and life-loving attitude that I love so much about Nagasaki.

My family has been privileged to enjoy the many events, tastes and experiences that Nagasaki has to offer. Through the JET Programme and through the staff members at the school I work at, fellow ALTs and CIRs, friends I have made during my time here, and the countless number of students I have met, I have learnt a lot about this little corner of Japan, and the important place it holds, in Japan and the larger world.

英語

Les Relations Internationales vues par un Français de Kôbe

Grâce (ou à cause du travail de mon père), j'ai vécu depuis tout petit dans de nombreux pays à travers le monde, pour des séjours allant de un à six ans. Et comme mon père avait l'habitude de dire: "Le meilleur moyen pour te faire des amis et de rencontrer les gens et d'essayer de parler avec eux. Intéresse-toi à leur langue, leur histoire et leurs coutumes. L'amitié passe avant tout par la communication." Grâce à ses précieux conseils, je n'ai jamais eu la moindre difficulté pour me faire des amis dans les différents pays où j'ai séjourné. Bien sûr, les premiers contacts n'étaient pas toujours faciles, mais dès qu'un intérêt commun apparaissait, j'étais immédiatement reconnu comme un membre du groupe à part entière.

Le seul pays où j'ai rencontré le plus de difficulté est paradoxalement celui qui consacre le plus de fonds au développement et à la promotion de son internationalisation, le Japon. Il y a bien sûr de nombreuses causes à cette difficulté: les adultes ont généralement plus de peines à établir des relations d'amitié avec des étrangers que les enfants, le rempart de la langue, la timidité même des Japonais, les profondes différences culturelles entre le monde occidental et asiatique ... Mais la chose qui m'a le plus profondément

marqué est le terme « *gai(koku)jin* ». Il semble que la plupart des Japonais divisent le monde en deux groupes, eux et le reste du monde. Dans cette vision bipartite, nous autres Non-Japonais sommes les représentants d'une *Terra Incognita*, dont seules quelques portions sont connues à travers les images véhiculées par les médias.

Certains d'entre vous trouveront que j'exagère peut-être dans ma description, mais si vous considérez un peu les questions-types que le Japonais lambda peut poser à un étranger (Êtes-vous étrangers ?; d'où venez-vous ?; aimez-vous le Japon ?), vous devez bien admettre qu'il semble au premier abord plus intéressé par ce que vous pouvez penser du Japon que par connaître un peu mieux votre pays d'origine.

Mais qu'on ne se trompe pas sur mes propos. Cela fait maintenant un peu plus d'un an que je travaille pour la préfecture du Hyôgo et mon travail m'a plus d'une fois prouvé que les officiels japonais n'ont rien à envier à leurs homologues étrangers en matière de relations internationales. Le Hyôgo, et la ville de Kôbe notamment, s'étant développé en grande partie grâce au commerce avec l'étranger, la région a depuis ses origines une tradition d'ouverture sur le monde,

A New Zealander in Nagasaki

Many ALTs come to love the cities that become their homes during their time on the JET Programme. I am no exception. Being an ALT with a wife and a small child in Nagasaki City has been one of the most rewarding experiences my family could ever have. Nagasaki is an important subject of both domestic and world history. It is a city steeped in local traditions that fill an entire year's calendar with festivals. Chinese-influenced O-bon, the famous Okunich festival, the Lantern festival and countless others, all reflect a strong sense of identity. Nagasaki has an abundant supply of fresh fish and good local cuisine. Its specialties, Champon, Sarandon and of course Castella, are instantly recognized all over Japan as symbols of Nagasaki. The architecture is rich with Gothic cathedrals, Chinese temples and Buddhist shrines, not to mention Chinatown, and the Dutch slope. And finally the beautiful surrounding hills that nature has so wonderfully bestowed upon this charming little port city add the finishing touches. The influence of foreign cultures on Nagasaki's cuisine, architecture and even festivals all make this city such an amazing place to live. It is

no surprise so many foreigners and Japanese people love Nagasaki.

Nagasaki's place in the history of Japan, and also the history of the world, are both wonderful and terrible examples of the importance of internationalisation. While the rest of Japan was shut off from the outside world (1641-1859) during the Edo period, Nagasaki was one of the few ports that had a small opening to the outside world. The island of Dejima, a major tourist attraction these days, was open to Dutch traders who brought with them Western medicine, fashion, trading goods and other wonders through which Japan could get a controlled look at the west. On the other side, the Dutch could get an even more restricted view of the closeted society Japan used to be. Although Japan eventually opened up to the larger world, foreigners continued to flock to Nagasaki and the locals, long accustomed to contact with the outside, continued to welcome and engage them. Being an ALT here in Nagasaki has made me realise how little this has changed. In Nagasaki, internationalisation is not just a word; it is an actual part of Nagasaki's past and present. There is a large